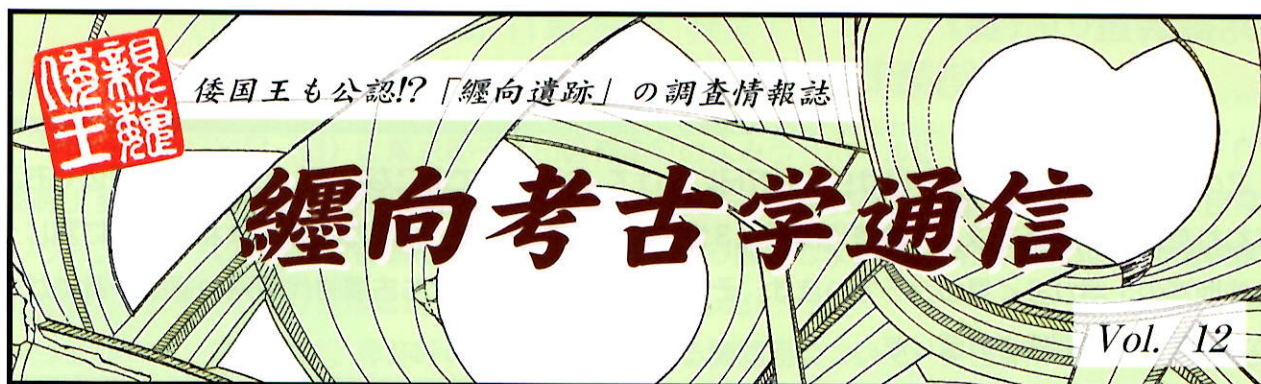




纏向遺跡辻地区に大型建物群の柱を復元しました！

纏向遺跡の辻地区と呼ばれる範囲では、これまでに複数回おこなわれた発掘調査の結果から、この場所に庄内3式期以前（3世紀中頃以前）の計画性が高い建物群（建物B・C・D）の存在が明らかとなりました。この建物群の発見は、纏向遺跡の名を全国にとどろかせる一因にもなりました。しかし、調査終了後は完全に埋め戻され、現在では空き地が広がるのみとなっていました。纏向遺跡を訪れた観光客の方々からも残念がる声が聞かれ、桜井市ではこの状況をなんとか改善できる方法はないものかと頭をかかえておりました。

そこで、桜井市では、建物群の遺構が発見された場所に柱を立てて明示する整備計画を立ち上げました。その資金の一部を従来のふるさと寄附金に加え、「GCF＝ガバメントクラウドファンディング」を活用して募集することとなりました。クラウドファンディングの募集期間は、平成29年12月1日～平成30年2月28日の3か月間という短い期間でしたが、1,611,000円という多くの寄附金が集まりました。

みなさまのあたたかいご支援のおかげをもちまして、辻地区における整備事業は平成30年3月末に無事終了し、大型建物群の柱の復元が完了しました。なお、今回設置した柱については、桜井木材協同組合から提供していただいた木材に防腐処理のための樹脂含浸を施したものを利用しました。さらに、柱の整備に伴い、これまで設置されていた辻地区の説明板に加え、新たに建物群の詳細な説明板を設置し、「史跡 纏向遺跡」の標柱も設置しました。辻地区における今回の整備が、遺跡の見える化に貢献し纏向遺跡を訪れるみなさまの理解の手助けになれば幸いです。



写真1 整備前の辻地区のようす



写真2 復元された大型建物群の柱



《発掘調査の概要》

纏向遺跡第191次調査 他地域の土器が多数出土

1. はじめに

この調査は平成29年4月27日から6月27日にかけて、太田地区でおこないました。調査地周辺でおこなわれた過去の調査では、古墳時代前期（3世紀代）の溝や柱穴、土坑などから大和の土器に混じって他地域の土器が多く見つっています。そのため、今回の調査でも古墳時代前期の遺構や遺物が見つかる可能性が期待されました。

2. 調査の成果

調査の結果、古墳時代前期（3世紀前半頃）の幅6m以上の落ち込みや幅約1mの溝のほか、柱穴と思われるピットが多数見つかりました。特に溝から多くの土器や木製品が出土しており、土器には大和だけでなく東海や北陸、吉備（現 岡山県）といった地域の土器が見つっています。東海地方で作られた甕には多量の煤が付着していました。また、木製品の中には火を起こす道具である火鑽臼^{ひきりうす}が出土しており、調査地周辺では大和地域以外から移動して来た人々が生活を営んでいたといえるでしょう。

今回、新たに生活の痕跡が見つかったことで、太田地区周辺では様々な地域の人々が集まり居住していた様子を改めて窺い知ることができました。今後も調査を続けていくことで、調査地周辺の人々の営みが明らかにされることを期待したいと思います。（西村知浩）



写真3 溝から出土した土器（北東から）

纏向遺跡第193次調査 纏向遺跡の墓地を発掘！

1. はじめに

纏向遺跡第193次調査はJR桜井線巻向駅の南西側の土地でおこないました。調査地は元々纏向小学校用地だった所です。小学校移転後、1980年代に一部発掘調査が行われ、墳丘が削られてしまった前方後方墳（メクリ1号墳）などが見つかりました。その後用地の大半は史跡纏向遺跡として指定されています。桜井市では史跡整備と史跡隣接地に「交流館」（遺跡のガイダンス等施設）建設を予定しています。そこで施設建設予定地に遺構があるか確認することと、史跡整備のための情報取得を目的に発掘調査をおこないました。

2. 調査の成果

調査の結果少なくとも3基の方形周溝墓が見つかりました。方形周溝墓とは名前通り方形で周囲に



写真4 調査区遠景（北から）

溝をめぐるお墓です。弥生時代からあるお墓の形で、溝の中に低い盛土があることが普通ですが、埴輪や葺石をもつことは原則ありません。今回見つかった方形周溝墓は盛土が後世に削られており、溝の痕跡だけが残っていました。埋葬施設も残っていませんでした。大きさは最大でも一辺約9mで、同じ纏向遺跡にある前方後円墳の箸墓古墳（全長約280m）や纏向石塚古墳（全長約99m）と比べて非常に小さいものです。いずれも溝から出土した土器からおおよそ3世紀に築かれたと考えられます。

またかつての発掘調査で見つけられていなかった、メクリ1号墳の東側をめぐる濠にたまった土の可能性のある土層も検出しました。確実ではありませんが、メクリ1号墳の大きさについてより詳細な情報を得ることができました。メクリ1号墳は全長28m、幅約20.1mになると考えられます。

3. まとめ

今回の調査地周辺ではこれまでも方形周溝墓が見つかっており、今回の調査分を足すと計6基の方形周溝墓と前方後円墳（メクリ1号墳）が密集していることが明らかになりました。そのため、一帯は墓地であったと考えられます。お墓は単に遺骸を埋葬する所というだけではなく、当時の社会のありかたを反映していると考えられます。前方後円墳よりも小さく墳墓の形もことなる方形周溝墓や前方後円墳に葬られた人々は、前方後円墳に葬られた人よりも社会的に劣った地位におかれていたのでしょうか。そうした階層性の強い社会が3世紀の奈良にあったことをあらためて示す調査成果となりました。

（森 暢郎）

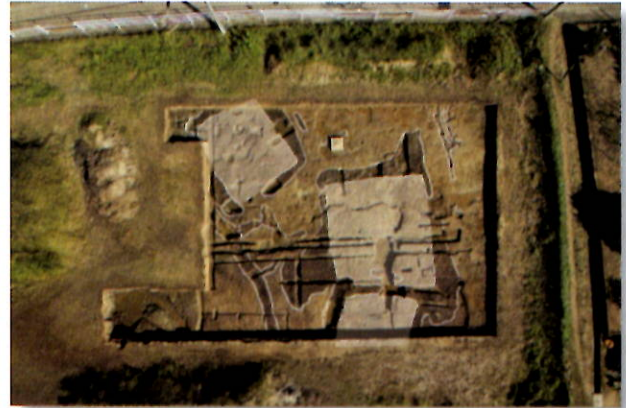


写真5 3基の方形周溝墓（白い箇所）

纏向遺跡第194次調査 茶ノ木塚古墳第2次調査

1. はじめに

桜井市の大字箸中一帯には、3世紀代に築造された大型の前方後円墳のほか、規模や時期の不明な古墳が多数存在しています。茶ノ木塚古墳もこうした古墳のひとつでしたが、平成28年度に第1次調査を実施し、墳丘の規模や築造時期を考える上で重要な成果を得ることが出来ました。

2. 調査の成果

今回の調査も第1次調査に引き続き、古墳の規模や形態、埋葬施設の確認を目的とし、墳丘南側と墳丘上の2か所で調査をおこないました。

墳丘南側では、墳丘裾と周濠外側の立ち上がりを確認することが出来ました。古墳の東側は未調査のため確定はできませんが、第1次調査の成果とあわせると茶ノ木塚古墳が本来は直径約35m、周濠幅



写真6 箸中地区の古墳群（北西から）



7m以上の円墳となる可能性が高まりました。埋葬施設については墳丘と共にすでに削られていたようです。そのかわり、古墳の築造時の様子が明らかとなりました。墳丘盛土の構築の仕方を観察すると、まず中心部分に土を盛り、そこから外側へと土を重ねて造られていたことがわかりました。

周濠からは埴輪や木製品が出土しています。埴輪は5世紀後半頃の特徴を持ち、第1次調査でも同時期の埴輪が出土していることから、茶ノ木塚古墳の築造はこの頃と考えられます。

3. まとめ

2度の発掘調査により茶ノ木塚古墳の本来の様子が明らかになってきました。築造された時期や規模がわかったことで、纏向古墳群での古墳築造を考える上で重要な資料を得ることが出来ました。周辺には謎に包まれたままの古墳が数多く存在していますが、今後もこのような地道な調査を継続し地域の歴史を明らかにしていきたいと思います。

(飯塚健太)

纏向遺跡第193次調査現地説明会開催！

平成29年11月11日(土)に纏向遺跡第193次調査現地説明会を開催しました。説明会当日は約700名の方が会場に足を運んでくださいました。説明会では、今回新たに発見された方形周溝墓の遺構の公開や、出土遺物の展示が行われ、来場された皆さんは調査担当者である森所員の解説を熱心に聞いておられました。なお現地説明会の資料を纏向学研究センターHP内において公開しておりますので、ぜひご覧ください。



写真7 現地説明会のようす

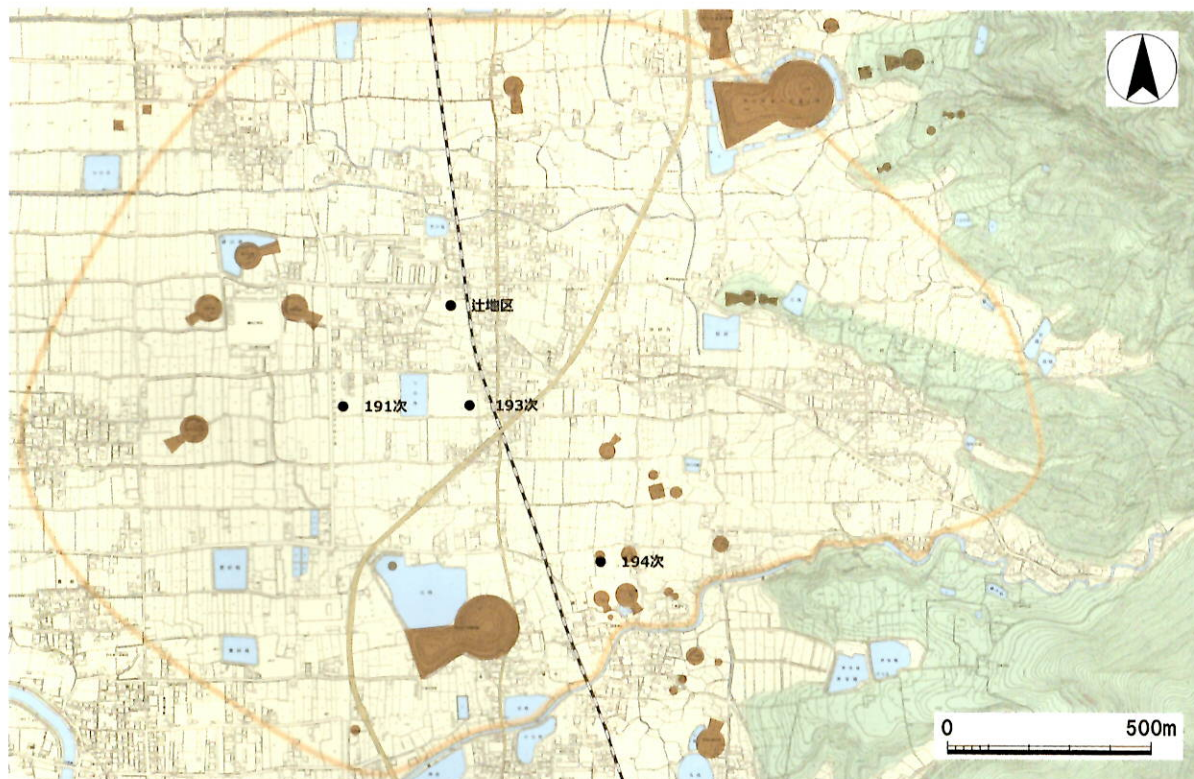


図1 辻地区・調査地の位置

《纏向学セミナーを開催しました！》

○ 第9回纏向学セミナー「前方後円墳の築造と葬送儀礼」

平成29年7月15日（土）に桜井市立図書館において、第9回纏向学セミナー「前方後円墳の築造と葬送儀礼」を開催しました。当日は天候にも恵まれ、約280名の方にお越しいただきました。

このセミナーでは、奈良大学教授で当センター共同研究員の小山田宏一先生をお招きし、標記の題でご講演いただいた後に、寺沢薫所長との対談を行いました。

小山田先生は、古墳築造の基礎的な解説や、初期古墳の構造、竪穴式石槨の築造順序について弥生墳墓と比較しながら述べられ、箸墓古墳の築造順序の復元に関しても言及されました。また、弥生時代と古墳時代の葬送儀礼の違いなどについても解説していただきました。

対談では、東アジアにおける古墳築造方法や、葬送儀礼における鏡の取り扱いなどについて白熱した議論が交わされました。



写真8 たくさんの方が聴講されました



写真9 講演される小山田先生

○ 第10回纏向学セミナー「倭女王卑弥呼の外交政策

ー景初三年六月の遣使をめぐってー

平成30年1月27日（土）に桜井市立図書館において、第10回纏向学セミナー「倭女王卑弥呼の外交政策ー景初三年六月の遣使をめぐってー」を開催しました。当日は寒空にもかかわらず約280名の方にご来場いただきました。

このセミナーでは、堺女子短期大学名誉学長・名誉教授の塚口義信先生をお招きし、標記の題でご講演いただいた後に、寺沢薫所長との対談を行いました。

塚口先生は、「魏志倭人伝」に記載の景初二年の卑弥呼の魏への遣使が、景初三年の誤写である可能性を文献史学の立場から論証し、遣使の目的や卑弥呼が破格の待遇を受けた理由などについての見解を述べられました。

対談では、景初三年と二年の違いや、卑弥呼の遣使の意図について議論が交わされました。



写真10 講演される塚口先生



写真11 対談中のようす

《東京日本橋 奈良まほろば館でのイベントに参加しました！》

天理市と桜井市、そして磯城郡が共同で古代ヤマト地域の見どころの展示・PRをおこなうイベント「ヤマトの古墳と遺跡～ヤマトの源流を考える～」が東京日本橋、奈良まほろば館にて平成29年8月3日（木）～15日（火）の期間中開催されました。

このイベント会期中の8月5日（土）、6日（日）の2日間は、ウィークエンドスペシャルとして講演や勾玉づくりイベントをおこない、当センターからは福祉所員が参加しました。

2日間で280名の方にご来場いただいた講演では、唐古・鍵遺跡、纏向遺跡そして大和古墳群の調査成果を発掘調査を担当した各市町の職員が解説し、纏向遺跡・箸墓古墳の調査に関する内容を福祉所員が担当しました。ワークショップにも約100名の方がご参加くださり会場は親子連れや外国人観光客の方々と大いに賑わいました。



写真 12 講演中のようす

《纏向考古楽講座を開催しました！》

平成29年9月2日、23日、10月14日の全3回にかけて纏向考古楽講座を開催しました。この講座は、纏向遺跡や地元の歴史を基礎から楽しく学ぶことを目的に、考古学初心者の方向けの内容となっています。

講座の内容は、考古学の基礎知識を当センター所員の解説で学んだり、発掘現場から出土した本物の土器を実際に触ったりしました。また、昔の自然環境を復元する環境考古学についても取り上げ、発掘現場の土から見つかる花粉によって環境を復元する方法を所員の解説や実習で学び、纏向遺跡の昔の環境について意見を交わしました。

さらに、纏向遺跡を実際に歩いてめぐったり、古代の技術体験なども行い、技術体験では纏向遺跡からも花粉が出土したベニバナを利用した染物体験を行いました。参加された皆さんからは積極的に質問や意見が飛び交い、充実した講座となりました。



写真 13 解説に聞き入る参加者の皆さん



写真 14 紅花染め体験中のようす

《東京フォーラムVI「卑弥呼」発見！ 親魏倭王卑弥呼に制詔すー卑弥呼の外交ー」 開催！》

平成29年10月29日（日）に東京都千代田区有楽町のよみうりホールにて、東京フォーラムVI「卑弥呼」発見！親魏倭王卑弥呼に制詔すー卑弥呼の外交ー」を桜井市の主催、読売新聞社・奈良県ビジネスビューロー・歴史街道推進協議会の後援により開催しました。当日はあいにくの雨模様でしたが、約600名の方が会場に足を運んでくださいました。

今回のフォーラムでは、卑弥呼の外交政策に関わる諸問題について、考古学や古代史を専門とされる先生方を講師としてお招きし、ご講演いただいた後、当センターの寺沢薫所長の司会・進行によるシンポジウムを行いました。

午前の部では、日本考古学協会会員で俳優の苅谷俊介先生より「卑弥呼の外交ー男弟の役割ー」、國學院大學客員教授で当センター共同研究員の柳田康雄先生より「卑弥呼以前の伊都国の外交」と題したご講演をいただきました。

午後の部では大阪大学大学院教授で当センター共同研究員の福永伸哉先生より「卑弥呼への回賜の品々とその行方」、徳島大学名誉教授の東潮先生より「卑弥呼と韓の辰王、燕の公孫淵」と題したご講演をいただきました。

シンポジウムでは、卑弥呼への回賜品に関することや卑弥呼の外交手腕に関すること、倭国と東アジア諸国との政治的な関係性などについて白熱した議論が交わされました。



写真 15 シンポジウムのようす

《平成29年度縄向学研究センター研究集会》



写真 16 研究集会のようす

平成30年2月24・25日の2日間、縄向学研究センターにおいて平成29年度定例研究集会を開催しました。この研究会は、当センターの共同研究員や関連する研究者をお呼びして縄向遺跡に関わる研究報告をおこなうもので、定期的に行われています。

1日目は名古屋大学名誉教授の中村俊夫氏や、当センター共同研究員の奥山誠義氏によって縄向遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定を用いた測定成果の報告がありました。

2日目は、午前中に大阪経済法科大学客員教授の前田晴人氏より「大市」の首長会同と女王卑弥呼の「共立」と題してご発表いただきました。午後からは、縄向遺跡辻地区で出土したト骨などの動物遺存体について奈良文化財研究所の山崎健氏、当センター所員の森から報告がありました。両日ともそれぞれの報告に対して活発な議論が交わされました。



《纏向遺跡を掘る調査員たち 11》

桜井市の調査員紹介コーナーです。今回は橋本輝彦さんです。橋本さんはこれまでに纏向遺跡で実施された発掘調査を数多く担当され、現在は桜井市纏向学研究センター統括研究員として纏向学の研究・普及啓発活動に尽力されています。

橋本輝彦（はしもとてるひこ） 奈良県吉野町出身

家業を継ぐべく大学へと進学しましたが、大学2年生の春に纏向石塚古墳の調査に参加させて頂いたことをきっかけに、桜井市で考古学の仕事をさせて頂く事となりました。気がつけば課内では長老となりましたので、もう「纏向遺跡を掘る」ことも無いと思いますが、過去の調査成果を再発掘したり、外部の研究者との共同研究を企画したりしながら、発掘とは違う手法で遺跡の実体に迫りたいと考えています。また、近年全国的な傾向として文化財の活用事業が観光活用一辺倒なものとなりつつありますが、これまでの文化財行政を教育委員会が担ってきたことの意味を今一度考え、より有意義な活用の方向を探っていきたいと思っています。



埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成30年9月30日（日）までの期間、平成30年度速報展24『50cm下の桜井』として、平成29年度に桜井市内でおこなわれた発掘調査成果の速報展を開催しています。

今回は今号でご報告した纏向遺跡各調査のほか、脇本遺跡の調査や二反田古墳のレーダー探査の成果報告などを展示しています。ぜひご覧ください。

開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで） 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日
入館料 / 大人300円 小・中学生 / 150円（20名以上の団体は大人200円 小・中学生100円）
桜井市芝58-2 お問い合わせ先 TEL0744-42-6005



桜井市立埋蔵文化財センター 刊行物のご案内

- * ガイドマップ『纏向へ行こう!』200円（2014年3月改訂 第5版）
 - * 平成29年度特別展『桜井の歴史を作った七人の人々』300円
 - * 桜井市制施行60周年記念プロジェクト
シンポジウム「国家誕生の地、桜井を語る」発表要旨集 500円
- ※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内（公財）桜井市文化財協会までお問い合わせください。
お問い合わせ先 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366 <http://www.sakurai-maibun.nara.jp/>

編集後記

今号では、平成29年度のセンターの活動、発掘調査の報告を中心に掲載しました。中でも、辻地区における整備事業完了のニュースを大きく取り上げましたが、纏向遺跡の整備はまだまだ始まったばかりですので、今後の進展に乞うご期待です！

N.N

纏向考古学通信 Vol.12

発行 平成30年5月18日
編集 桜井市纏向学研究センター
〒633-0085 奈良県桜井市東田339

TEL 0744-45-0590

FAX 0744-45-0590

ホームページ 纏向学研究センターで検索!!

纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄付いただいた方に配布しています。

